

# 第7章 資 源

ここでは、主として生物学的な立場から本種の資源に考察を加えることとする。

## 第1節 生態・漁況からみた資源

### 1. 分布・回遊からみた資源

シイラは世界の暖海に分布しており、季節的に低緯度水域から高緯度水域へ回遊する。しかし、同一の魚群が赤道附近から北緯45°附近まで回遊するかどうかは疑問である。むしろ、低緯度水域の魚群は産卵しながら中緯度水域に分散し、中緯度水域の魚群は産卵しながら高緯度水域に達すると考えた方がより妥当と考えられる。低緯度水域の魚群が高緯度水域の魚群に比較して大型であるのは、低緯度水域ほど本種の本来の適生息地であり、主産卵場であるためであろう。

以上のように、低緯度水域から中緯度水域にかけてシイラの産卵親魚が密であるけれども、大洋のその水域において魚群を有効に捕獲する手段を持たないとすると、産卵親魚は低緯度水域から中緯度水域にわたって保護されているといえる。したがって、現在の漁業の態勢ではシイラの再生力に壊滅的な打撃を人為的に与える危険は非常に少ない。

### 2. 繁殖・成育生態からみた資源

シイラは満2年目から産卵群に加わり、低緯度水域から高緯度水域にわたる外洋で産卵するが、このことは次の点で資源保護のために有利である。広大な生活圏を持つシイラは資源を広く分散させることが必要であろう。そのためには放出された受精卵および仔魚を海流によつて分散させるがよい。また、広く分散させることは他の魚の捕食による減耗を防ぎ、反面、同種間の摂餌競争がさげられて成育するに都合がよい。

シイラ稚魚は全長4 cm位になると流れ藻について生活するようになる。流れ藻には他の稚魚類が十数種もついており、これらの中で食う食われるの関係が生じるわけであるが、稚魚類のうちでシイラの成長率が極めて高いから、流れ藻つき生活において他の魚類より摂餌競争を有利にしている。

### 3. 摂餌生態からみた資源

流れ藻生活において本種の稚魚は他の魚種より摂餌競争に優れているが、一方、あまり群をなしていない。流れ藻を離れた幼魚においても同様である。群が小さいと同種間の摂餌競争がさげられ、資源の集団的な初期減耗を防ぐ上において効果があろう。

成魚は食性に選択性がなく、外洋生物間の食物連鎖の中で末端捕食者の生態的地位にある。したがって、シイラは他の生物の餌となることは少ない。しかし、その一面に索餌水層範囲がごく上層に限られているため、餌が充分でない場合も起り得る。そのような場合にシイラの稚・幼魚を捕食する。

#### 4. 漁況からみた資源

シイラが漁獲されるのは、特定の気象や海況に左右されることが多い。また、日本海沿岸の漬漁場での漁獲を標識放流結果からみると再捕率は非常に高い。シイラ魚群が沿岸ぞいに北上するものとすれば、魚群は九州沿岸から漬漁場を通過してきたことになるから、島根県沿岸に達する頃には魚群は少ないと考えられる。しかし、ここで全国第1位の漁獲があるのは、シイラは一般に沿岸水域を好まず接岸しないが、向岸流によつて沖合から魚群が接岸した時だけ漁獲の対象となり、沖合水域でシイラを獲る効果的な漁法がないことによる。

以上のように、漁獲される機会がおのずから制約されるのは、シイラ資源保持の立場から好ましいことである。

#### 第2節 漁具・漁法からみた資源

シイラを捕獲する漁具・漁法は日本海側と太平洋側とは全く異なっている。それは、両海域の環境の相違に基づくものである。そのために、太平洋側の漁具・漁法が釣・延縄という消極的であり、しかも、カツオ・マグロの副産物として漁獲されるに過ぎないことは、本種の資源維持の立場からみて極めて重大である。一方、日本海側ではシイラ漬漁業によつて積極的、かつ能率的に漁獲され、標識放流魚の約1/2が1か月間に再捕されるという注目すべき結果を得ている。しかし、日本近海に回遊するシイラ資源量を海況的に推すと、漁獲量の少ない太平洋側に資源の主体があり、日本海側に回遊する量は徴々たるものであるから、今日まで比較的安定した漁業が継続されてきたものと考えられる。